H21.12.1

（第３種郵便物認可）　新聞定価 １カ月 8,925円（消費税 425円を含む）／６カ月53,550円（消費税2,550円を含む）

日刊建設工業新聞

■ 日刊建設工業新聞社 ■

支社
大阪 TEL 06(6942)2601 Email osaka@decn.co.jp
名古屋 TEL 052(961)2631 Email nagoya@decn.co.jp
横浜 TEL 045(201)3821 Email yokohama@decn.co.jp
関東 TEL 048(829)2851 Email kanto@decn.co.jp
東北 TEL 022(222)4222 Email tohoku@decn.co.jp
九州 TEL 092(741)4605 Email kyusyu@decn.co.jp

総局
北海道 TEL 011(261)7653 Email hokkaido@decn.co.jp
千葉 TEL 043(222)4036 Email chiba@decn.co.jp
北陸 TEL 025(229)5411 Email hokuriku@decn.co.jp
中国 TEL 082(221)7236 Email hiroshima@decn.co.jp
四国 TEL 087(837)5072 Email shikoku@decn.co.jp

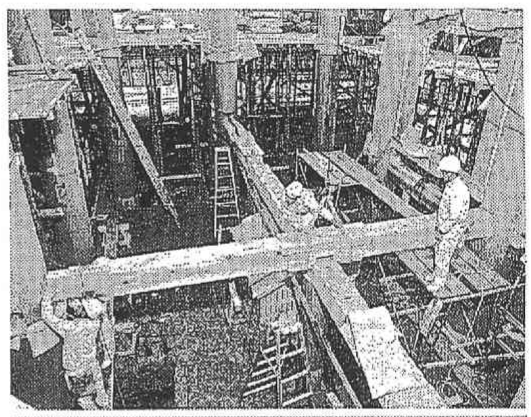
神宮式年造営庁技術総監
中村　光彦氏

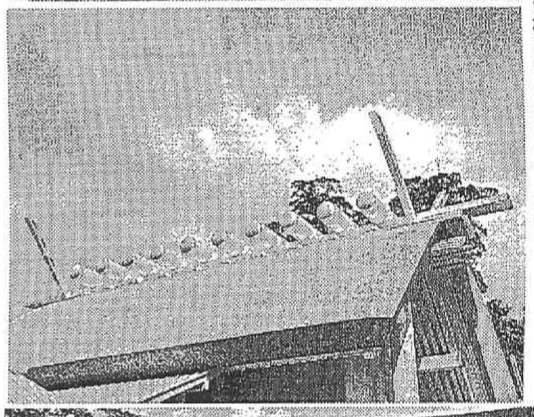
Interview

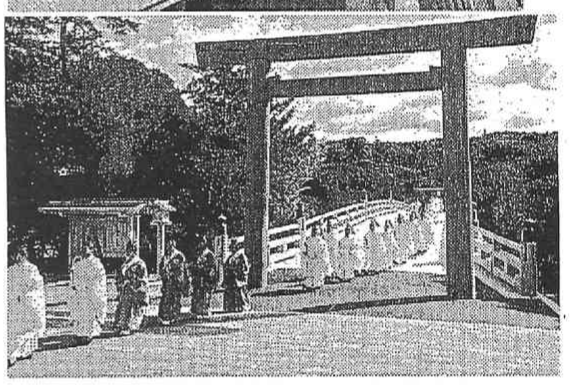
伊勢神宮式年遷宮
伝統を未来へ生かしていく

三重県伊勢市の伊勢神宮（神宮）で約1300年にわたり続けられてきた式年遷宮。20年ごとに社殿を建て替え、装飾なども新調する大祭であり、次回は4年後に行われる。13（平成25）年の第62回式年遷宮で建築技術のまとめ役となる神宮式年造営庁技術総監、中村光彦氏（全日本建築士会理事）に、その伝統と、現代や未来にも通じる意義などを聞いた。

（編集部・横川貢雄）







第61回式年遷宮（93年）での造営㊤と皇大神宮（内宮）

今年11月３日に行われた宇治橋渡始式
（上３枚の写真は神宮司庁提供）

――伊勢神宮の価値をどう考える。

「伊勢神宮というのは一般的な呼び名であって、天照大御神を祭ってある内宮と豊受大御神を祭ってある外宮を中心とした社が全部で125あり、それぞれに正式名称がある。日本の伝説の原点ともいえる神社であるとともに、建築的にも極めて高い価値を持っている。かつて日本に3年余り滞在したことがあるドイツの世界的建築家、ブルーノ・タウトは、さまざまな近代建築も建っている日本の中でも、特に価値の高いものとして伊勢神宮と桂離宮を挙げた。伊勢神宮には、日本の風土、伝統の原型を見ることができる」

――建物の特徴とは。

「材料や構造がそのまま生かされた最もシンプルで究極的な均衡の姿が見られ、まさに近代建築にも通じるものがあると述べたタウトに限らず、極めて価値の高い建築として伊勢神宮を挙げる専門家は多い。それは過去から現在、そして未来にもつながる普遍的な価値を持つものといえる。また自然と建物との完全な調和が見られるという点でも、地球環境時代の今日、大きな意味を持っている」

――式年遷宮の意義とは。

「式年遷宮は690年、持統天皇の時代に始まったとされる。何のためかについては諸説あるが、一般的に言われているのは、神が住まわれる建物が風雨に長年さらされて見苦しくなるのを防ぐため、20年ごとに建て替えるというものだ。建物の掘立柱には基礎がなく、地中にそのまま入っているため、木材が傷まないのは20年が限度ではなかったかとも言われている。そして、技術を伝承する目的もあるとされる。他の有力な神社にも同じ制度があったが、今日まで完全な形で引き継がれているのは伊勢神宮だけになっている」

――どのように進められていくのか。

「62回目となる平成25年の式年遷宮では、内宮、外宮いくつかの社での御遷宮が行われる。8年前からさまざまな祭儀や行事が行われるが、今年はこの期間のちょうど折り返し年に当たり、新たに架け替えた宇治橋の渡始式（わたりはじめしき）が11月3日に行われた。式年遷宮では、それぞれの時代に最高の技術を駆使し、正殿などの建て替えだけでなく、御装束神宝（神の衣服や装飾、御物）も新調される。使った木材は、宇治橋の鳥居や他の神社の用材としてリサイクルされる。基本的に昔と同じことが行われ引き継がれるのだが、各時代の社会的条件が異なることを背景に、いろいろと工夫もされてきている」

――技術総監の役割とは。

「式年遷宮での建築技術のまとめ役になる。遷宮の8年前から本格的準備が始まるのに合わせ、臨時の神宮式年造営庁が設置される。そこで任命されるのが技術総監で、任期は式年遷宮がすべて完了する平成26年までとなっている。式年遷宮の伝統に触れながら、毎日が勉強であり、未来に続く日本の伝統の原点としての伊勢神宮、式年遷宮の意義を、今日の環境や建築上の問題などとも関係付けて考えるようにしている」

――建て替えの材料はどのように調達するのか。

「式年遷宮では大量のヒノキを使う。もともとは伊勢の宮域林から用材を切り出していたが、鎌倉時代に原木が枯渇してしまい、木曽のヒノキが使われるようになった。しかし、そのままでは木曽の木にも限度があるため、宮域林でヒノキを計画的に植林する200年計画が進められている。今回の式年遷宮では、宮域林の間伐材が全体の20%ほどに初めて使われる」

――伝統は市民生活にどう生かされているのか。

「伊勢は歴史的に見て、神領として特別な扱いを受けてきた。このため、市民が昔からの伝統や習慣を守り伝えている。伊勢市は伊勢神宮の伝統である『生成（なな）り』をコンセプトにまちづくりを進めている。生成りとは、ありのままを良しとすることで、日本建築の本質にも通じる。これは興味深いまちづくりであり、伝統を未来へと生かしていく取り組みといえる。12月に伊勢市と東京で『日仏景観会議・伊勢』が開かれる。伊勢市の取り組みをまちづくりの一つのモデルとして考え、全国に発信する場としたい」。

日仏景観会議伊勢、20日から

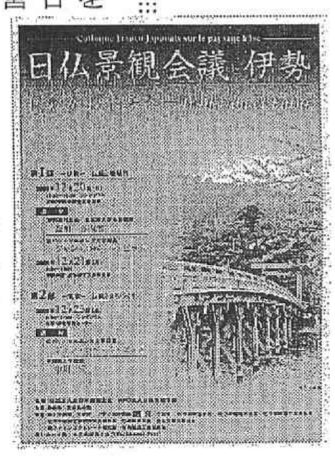
13年の第62回神宮式年遷宮を前に、日本の伝統と地域固有の価値がまちづくりに持つ意味を考えようと、「日仏景観会議　伊勢―伝統から未来へ」が20日と21日、23日の3日間、三重県伊勢市と東京都千代田区で開かれる。全日本建築士会とNPO法人日仏景観会議が主催。

全日本建築士会ら

初日のシンポジウムは伊勢市の伊勢市観光文化会館で、中村光彦神宮式年造営庁技術総監の基調報告に続き、明治村館長の飯田喜四郎名大名誉教授と前パリ・ソルボンヌ大学総長のジャン・ロベール・ピット氏が基調講演を行う。翌日は伊勢神宮（内宮）の特別参拝と神楽特別拝観をはじめ、式年遷宮山田工作所の見学を予定。

23日は東京都千代田区の学術総合センターに会場を移し、中村氏の基調報告、ピット氏と中川武早大教授の基調講演、パネルディスカッションなどが企画されている。

国土交通省、文化庁、フランス大使館、日刊建設工業新聞社などが後援。問い合わせは全日本建築士会事務局（電話03・3367・7281）へ。詳細はホームページ(http://cfjp.org/)を参照。



筑紫さんなら…

記者手帖

ジャーナリストの筑紫哲也さんが亡くなって1年。生前ゆかりのあった著名人ら30人が筑紫さんについて語ったムック『筑紫哲也』（朝日新聞出版）がこのほど発売され、今月にはTBS主催のシンポジウムも予定されている◆新聞、雑誌、テレビとメディアを渡り歩き、TBS「NEWS23」のメーンキャスターを18年にわたって務めるなど、テレビジャーナリズムを確立したともいわれる筑紫さんの早す

んな相手も最初は肯定的にとらえる姿勢を貫いたという。「これはけしからん」と切り捨てるのではなく、「ではどうしたら良いか」と考え、単純な善悪二元論とは一線を画した◆公共事業には批判的だったが、一方で河川を自然の姿に再整備するといった新たな公共事業も提案していた。建設業界の活性化にも配慮する優しさを持ち合わせていたのだろう◆公共事業をただ切り捨て、建設業者の取り付く島を用意しない現政権の姿を、天国の筑紫さんはどうとらえ

12月8、9日に空港技術報告会　国交省航空局

空港の質を高めるため

国土交通省航空局は12月の両日、同省共用大会議室で10回空港技術報告会」を開「空港の質を高めるために」テーマに、同会で過去に発表最先端技術の現在の研究・況や適用事例などを紹介す般の聴講も可能。

8日は澤の屋旅館館主のが「まちがあって、人がいがある」と題して基調講演て「21世紀の空港新技術～術は今～」をテーマに、「際空港出国エリア再開発」国際空港計画技術部）、「RCプレキャスト舗装版の適用性」（ガイアートTの事業部）などの発表がある。

9日は「空港新技術」を に、「空港舗装の診断技術 取り組み」（国土技術政策 究所空港施設研究室）、「 スファルト舗装の耐久性向 けた取り組み」（港湾空港 究所空港研究センター）な り上げる。

聴講希望者は航空局空港 企画課（aoyama-t2pw@m p）へ。